

広がる思いやり

熊本県 白川中学校 1年 福田 沙良

「地震です、地震です。」

ブザーとともに一斉に鳴りだした警報音。静かだった深夜の体育館に、ざわめきが広がる。あちこちから聞こえる「またか……」という声とため息。私も、避難してきた他の人たちも、心身ともに疲れ切っていた。そう、この日は熊本地震の真ただ中だったのだ。

その翌朝。「パンとおにぎり、どっちか選んでくださいね～」という明るい声とともに、数人の若い男女が、避難してきた人に配膳をしていた。その日から、だんだんと避難所の人の笑顔が増えた。体育館の入り口付近にスペースを作り、配膳をしているらしく、市役所の人かと思ったら、自然と集まった人たちでやっていると聞いて驚いた。その行動力は、自分には無いものだったからだ。

その日の夜、配膳の片づけをする女性に、何か手伝うことはないかと尋ねると、お盆を拭くよう頼まれた。よく見るとそのお盆は私が小学校のときに給食で使っていたものだった。というのも、この避難所は私がついこの前卒業した小学校なのだ。なんだか懐かしく感じた。その日をきっかけに、配膳や掃除などだんだんと手伝いをする人が増えていった。

ある日、避難所で新しくできた友達と、体育館の床やトイレの掃除をしていたときだった。トイレの個室に財布が落ちていた。持ち主がわからなかったので避難所の本部に届けると、後日、避難していた一人のおばあさんのものだとわかった。次の日おばあさんは、私たちに何度も「ありがとう、ありがとう」とお礼を言って、お菓子までくれた。おばあさんは脚が悪いらしく、その日から配膳のお盆を持つのを手伝うことにした。そのたび笑顔で、「いつもありがとう」と言ってくれて、私もその笑顔に元気をもらったし、心が温かくなった。

本震から一週間も経つと、徐々に避難所の手伝いをする人も増えてきた。力のある人は届いた物資の仕分けをしたり、そうでない人も家から炊飯器を持ち寄ったりして炊き出しに協力していた。一人ひとりが自分にできる手伝いをして、思いやりの心が飛び交う温かい空間になっていった。家に帰れるようになってからも、毎日朝から手伝いをしにいったら、避難所の人と近況を話したり、小さい子と遊んだりして、地震のときの怖さも少しずつ薄れていった。

地震は私たちに大きな被害をもたらした。怖かったし、悲しいこともたびたび見聞きした。でも、悪いことばかりではなかったと思う。人のやさしい気持ちを感じる場面がたくさんあって、いろいろな人との新しい出会いもあって、そういう意味ではよい経験になった。どんな状況にあっても、思いやりの気持ちをもつことで、必ず前に進めると強く実感した。